

---

リリカル銀魂 Strikers ~ 銀女神鎮魂歌 ~ ショートストーリー

真王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカル銀魂 Strikers 〈銀女神鎮魂歌〉ショートストーリー

### 【Nコード】

N8198W

### 【作者名】

真王

### 【あらすじ】

我がと投稿しているリリカル銀魂 Strikers 〈銀女神鎮魂歌〉のショートストーリー。みたいなら見てくだせえ！

なのは「ライバルだもん」(前書き)

「銀さんは私の物だよ」

なのは「ライバルだもん」

機動六課のお食事タイム、ある時なのはとフェイトに言った。

なのは「フェイトちゃん、この前銀さんに裸見られたとかどうとか  
いったよね？」

フェイト「え？あ、い、言ったよもちろん」

フェイトはいきなりに発言にどぎまぎながら答える。

だがななめ45度傾いた質問をしてきた。

なのは「だったら……そ、そのまま銀さんのベットに入っ  
たりしてないかな？」

ブー――――  
――――！！！！！！

それを聞いたフェイトはもちろん銀時や他に食事していた方々まで  
吹いた。

銀時「ちよつとおおお！！！！なのはさんんん？？お前なんてこと  
言つてんのおお！！！！」

フェイト「なななななななのは！！！！そそそそそそんなこ  
としてしてないから！！！！！！」

銀時は怒鳴り、フェイトは全力で否定した。

なのは「そっか、そうだよね」

なのは笑顔になって銀時とフェイトは安心の息を吐くが、

なのは「なら、今から犯つても遅くはないってことだね!!」

銀時「尚更アウトオオオオオオオオオオ!!!!!!」

もはや取り返しがつかなさそうな状態なのは。

なのは「そんなわけで、銀さん！私が永遠の妻になるから！」

フェイト「なのはあああ!!! 銀時は渡さない!!!」

シグナム「テストロツサ!!! 貴様も抜け駆けは許さんぞ!!!」

アルフ「アタシだって!!!」

リインフォース「銀時は私の物です!!!」

ティアナ「兄さんを汚すなあ!!!」

スバル「銀さんは渡しませんよお!!!」

そう言つてラバーズ達は訓練場で戦争を起こしました。

銀時「なんでこーなるの？」

ネプテューヌ「もてる男の宿命だよ・・・的な」

この後銀時も彼女達のファンクラブの方々（+ビビ）に追われることとなるのは言うまでもない。

なのは「ライバルだもん」(後書き)

感想を待つ。

「ピ」「なのちゅん！」（前書き）

「ハア、ハア、ハア、……はっ！？イカン！抑えなきや押さえなきや……」

「ビビ」なのはちゃんーん！

ネプギアがビビになののについて話している。

ネプギア「ビビさんってなのはさんのことが好きなんですか？」

ビビ「もちろんよ！転生する前から私なのはちゃんだーい好きなんだから！..！」

なのは絡みになると興奮するビビ。

ビビ「でもまあ、なのはちゃんあの言葉も聞きたかったなあ...」

ネプギア「あの言葉？」

ネプギアは首をかしげる。

ビビ「無印なのはちゃんのあるセリフだけだね。まずレイジングハートを回して...」

ビビが木の棒を持って振り回してまるで無印のジュエルシード封印のしぐさをする。

ビビ「リリカル・マジカル・ジュエルシード封印！どうだった？」

ネプギア「どうだったって言われましても...恥ずかしくないんですか？」

ネプギアは少々引いている。

ビビ「全然！寧ろなのはちゃんになりきった感じ！無印なのはちゃんはこんなポーズしてとっても可愛いんだから！..！」



ビビは目を輝かせている。

ビビ「さあネプギアちゃん！一緒にリリカルマジかるやろっよ！答えは聞いてない。リリカルマジカル？」

ネプギア「リ、リリカルマジカル・・・」

ノリノリのビビにどきまぎのネプギア。

ネプギア「やっぱり恥ずかしいよこれ・・・！」

その近くの木陰

なのは「ビビちゃん？ネプギアちゃんも一緒に頭ひやそっか？」

笑ってない笑顔で木をメシメシと握りながら黒いオーラを纏っているのが見えていました。

「へ」「なのはずか〜ん!」（後書き）

19歳じゃ恥ずかしいものだらうね…

シグナム「戦闘なう」(前書き)

「私は常に戦い続けるのみ」

シグナム「戦闘なう」

カキイン！カキイン！

訓練場でシグナムとエリオが稽古している。

シグナム「甘い！」

エリオ「うわ！」

エリオは一本取られる。

シグナム「ここまでだ。出直せ」

エリオ「うう・・・でもまだ負けませんよ！」

エリオは負けない闘志を燃やしている。

シグナム「フ、その意気込みを忘れるな」

エリオ「ハイ！」

エリオは訓練場を後にした。

すれ違いにレオンがやってくる。

レオン「性が出るな。シグナム」

シグナム「レオンか」

シグナムはレオンが持ってきた水を飲む。

レオン「私にもエリオのようなああいうちゃんちゃん感じに奴らを弟子にしてたことがあったな」

シグナム「エリオと私は師弟ではない。だがレオンが弟子を持つてたことに興味があるな」

レオン「ああ、私によく負けた後『いつかレオン師匠を超えてみせる！』とかよくいってたな。今は山の中で武者修行をしているらしいがな」

シグナム「ふ、似ているな、それは」

レオンとシグナムは笑う。

レオン「それはそれとして、始めるか！」

シグナム「そうこなくてはな！」

レオンとシグナムの戦闘が勃発した。

やっぱり似た者同士であった。

アイエフ「メアド決めなきや」(前書き)

「やっぱケータイはいいわね」

アイエフ「メアド決めなきゃ」

ピッ、ピッピッ

アイエフがケータイをいじっている。

アイエフ「ん〜、だんだんマスターしてきたわ」

アイエフはパクロスをやっていた。

コンパ「アイちゃん、いい加減ケータイを使いすぎです」

アイエフ「あ〜、待って待って、切りのいいところで止めるから」

なのは「でもそう言って止めなかったのどこのどいつかなあ？」

フェイト「それに子供がそれを使っちゃだめだよ」

ネプテューヌ「イヤあ、アイちゃん3年前からも使ってたみたいだよ」

レーティア「そうなの？」

銀時「んなこたあいいがさっさと終われよ」

銀時がケータイを取り上げようとする。

アイエフ「ちょっとはなしなさいよ」

銀時「いいからやめろ」

アイエフともみくちやしているど、

パキヤッ

銀時、アイエフ「あ」

全員「あ」

アイエフのケータイは銀時がふんずけてしまった。

アイエフ「あああ・・・私のケータイがあ・・・」

なのは「銀さん・・・」

フェイト「銀時・・・」

銀時「え？ちよ、止めて、その目で見ないで」

シヨックを受けるアイエフに全員が銀時を睨む。  
すると、

アイエフ「うりゅ・・・」

アイエフが涙目になった。

フェイト「あ、アイエフ？どうしたの？」

アイエフ「私、ケータイが無いと・・・」

コンパ「すいません、アイちゃんケータイが壊れるとこんな感じになっちゃいます・・・」

どうやらコンパはアイエフの豹変を知っているらしい。

なのは「だ、大丈夫アイエフちゃん・・・」

アイエフ「うん、ありがとなのはちゃん・・・」

全員（コンパ除く）「ちゃん!？」

アイエフらしからぬちゃん付け。

確かに変になってる。



コンパ「ほら、お手手つないであげるですから付いてくるです」「  
アイエフ「うん……」

幼児退行したアイエフはコンパと手をつないで一緒に歩く。  
とつてもシユールだ。

全員啞然とし、

ネプテユーン「アイちゃん、あんな一面あつたんだ……」

銀時「なんか……すっげ〜悪いことしたな……」

ジャンヌ「で、でもでも、あのアイちゃん見て胸キュンしちゃった」  
なのは「た、確かに」

はやて「否定できひんな……」

ビビ「ギャップ萌えエエ……（\*´、´）」「

レーティア「ちよつともつたいないわね……」

ギルシア「ギャップ萌え最高!!」

アリア「あります!」

ムツリ「……」

アイエフの意外すぎる一面を見た一同であつた。

アイエフ「メアド決めなきゃ」(後書き)

アイエフはケータイが無いと幼稚になっちゃうんです

ジャンヌ「夏ですから」(前書き)

「夏と言えばかき氷や夏祭りやスイカ……そして海！最高だわ……」

ジャンヌ「夏ですから」

ミッドチルダは夏真っ盛り。

ジャンヌ「ねえみんな。今度海行く時のために水着買おつか」

はやて「水着か。そりゃ大賛成や。たわわと揺れるあれも拝まん  
と…」

なのは「はやてちゃん？」

はやて「うそうそ、なのはちゃん冗談やから…」

女性陣は水着の話で持ちきりだ。

ネプギア「水着ですか」

ネプテューヌ「それならちようど良かった！是非試してみたかった  
ものがあるんだよね」

はやて「なんや？もったいぶらず言つて見い」

ネプテューヌ「フッフ、見て驚け！これだよ！」

ネプテューヌが取り出したのは紫色のビギニ。

・・・だがネプテューヌの体ではあわない。

なのは「・・・ネプちゃんどういうこと？」

ネプテューヌ「だから最後まで聞いてって。変身」

ネプテューヌは女神化した。

先ほど持っていた紫ビギニを着て。

パープルハート「どうかしら？」

ノワール「ま、まさかそのパターンでいくなんて…」

フェイト「凄い発想だね」

ジャンヌ「グラビアアイドル狙えるかも？」

レーティア「それじゃあ各自水着を用意しましょう？」

というわけで女性陣は水着を買いに行った。

ヤルオ「・・・これはいいこと聞いた。女だけ楽しむのは駄目だよ。僕等もいくんだからな」

影でヤルオが盗み聞きしていたのは言うまでもない。

その後はやてとか貧乳組みが暴走していたことは追加しておく。

ジャンヌ「夏ですから」(後書き)

海はいいな。

コンパ「みなさん」(前書き)

「ご飯の時間ですよ」

コンパ「みなさん」

### 機動六課食堂

コンパ「皆さん、今日は私が精神込めて作った弁当があります」  
ネプテューヌ「おお〜！コンパのお料理久しぶりだよ〜！」

コンパが手づくり弁当を持ってきてネプテューヌらは嬉しそうだ。

なのは「あ、コンパちゃん料理で来たんだ」

コンパ「看護師として当然のことをしたまです。エッヘン」

胸を張るコンパ。

技術が低いのが玉にキズ。

アイエフ「まあパーティだった時はコンパが料理担当だったしね」

ネプテューヌ「こっぴどく見えて料理経験ないしね！」

アイエフ「余計なこと言わないの」

コンパ以外は料理経験ゼロのようだ。

銀時「でだ。どんな料理なんだろうな」

コンパ「試食してみます」

コンパの仰ぎに銀時は試食。  
すると、

銀時「お、マジでうめえ！」

新八「ホントだ！」



神楽「うおお！！コンパマジ天使アル！」  
はやて「うちに引けを取らんな…」

ほとんどコンパの料理は高評価だ。

フェイト「うん、コンパがいつかいいお嫁さんになるかも」

アイエフ「（ピクツ）」

ジャンヌ「いいね！私なら貰おうっかな？」

ビビ「私もいいかも（\* \*）」

アイエフ「（ピクピクツ）」

いきなりコンパを嫁にしようか宣言が聞こえる。

ギルシア「じゃあいだとつて俺様が…」

アイエフ「いい加減にしなさいよあんたら！！コンパはあたしの嫁  
よ！！！」

全員「……………」

アイエフ「……………あ」

ギルシアが言いかけたところアイエフが自爆発言投下。

コンパ「あいちゃんったら／／／／／」

コンパは顔を赤くする。

ネプテューヌ「アイちゃんヒューヒュー」

銀時「お前そんな趣味があったのか」

アイエフ「ち、ちが、そんなじゃないのよ！！！」

レーティア「分かってるわ。あなたはいいゆり関係を築けるって」

ビビ「羨ましいよコンチクセウ！」

アイエフ「分かってないイイイイイい！……！……！誤解よそれはア  
アアアアああ……！」

そしてこの後もアイエフはそのネタでコツテリ絞られた。

コンパ「みなぎくん」(後書き)

そんなパターンもある。

「ビ」「ネプギア・・・」(前書き)

「なんて恐ろしい子...!」

「ビビ」「ネプギア……」

ビビ「ハア……」

ビビがなぜか疲れた顔をして溜息を吐く。

ネプテューヌ「あれ？ビビちゃんどうしたの？」

そこへネプテューヌが声をかける。

ビビ「ああ、ネプテューヌちゃん。聞いてよ、ネプギアちゃんが……」  
ネプギア「リリカル・マジカル、魔法少女リリカルネプギア、ここに参上です！」

ビビが言おうとしたら無印なのはバリアジャケットを着てレイジングハート（本物）をくるくる振り回しているネプギアが現れた。

ネプテューヌ「………ビビちゃん？これどういうこと？」

ビビ「いやあのね、一緒に無印なのはちゃんの踊りやろっつていつも隠れてやってたらネプギアちゃんすっごいハマっちゃってすっごい完成度もっちゃって……何か負けた気がして……」

ビビはあまりのネプギアの踊りの完成の良さに落胆した。

ネプテューヌは頭を抱える。

ネプテューヌ「なんてことしてくれるのよ。ネプギアはハマったらノリ良くなっちゃうんだよ」



ビビ「ネプギア・・・」(後書き)

ちなみにベールがやってたのは男が裸のゲーム。

それゆえネプギアは裸をハマってしまったことがあります。(ゲー

ム経験談)

「プリア」プリアです」「(前書き)

「現在プリニーの指導係としています」



プリア「プリアです」

銀時「お〜い、パフェ持ってきてくれないか？」

プリア「チョコパフェ持ってきました」

銀時「お、サンキューな」

銀時がプリアからパフェを買った。

ティアナ「ん〜、このペースだと間に合いすぎね…」

プリア「すいませ〜ん、はやてさんから追加の書類です」

ティアナ「あ、そこに置いといて、ちょうどもう仕事欲しかったのよ」

ティアナの隣にプリアは書類を置く。

桂「・・・無償にのりそばが食べたくなってきた」

プリア「桂さん、のりそばありますけどあげますよ？」

桂「おお、かたじけないプリアどの！」

桂はプリアを感謝した。

レーティア「ああ、買い物に行くのを忘れてたわ…」

プリア「それでしたら、僕が買ってあげましたよ。それからリルち

やん用のおむつも」  
レーティア「あら、気が聞くのね」

そんなある日

銀時「ところでようプリア、お前未来予知的なもん持つてるか？」  
プリア「そんな大それたものは持ってませんよ。ただ次にするべきことをしなければならぬだけです」

なのは「いやいやそうじゃないよ。人が困つてるときにひよこつと現れてすぐに解消してくれることに驚いてるんだよ」

プリア「前もって事前に用意しないとイケない癖でしてね」

銀時「お前：少しプリーっばいぞ」

プリア「確かに、僕はプリーニーの特性を色濃く残ったのかもしれない。どうなるにしろ、これが今の僕ですから」

銀時、なのは「……………」

プリア「おっと、はやてさんが仕事疲れでジュース飲みたがってる気がする。買ってこよう」

そう言つてプリアはジュース買うために走り去つていった。

なのは「頑張つてるんだね」

銀時「あいつを悪用する人がいなければいいがな……」

その後もプリアは何時も通りやっていた。  
だがプリーニーと同じくパシリということになる。

プリア「プリアです」(後書き)

ある意味特殊能力だろうね。

神「たこ焼きや！」（前書き）

「ワイは絶対に伝説のたこ焼きを作るで!!」

神「たこ焼きや！」

ネプギア「 그레이さんから聞きましたけど、たこ焼きが好きなんですか？」

神「おうよ。俺様はたこ焼きが大好きだ」

ネプギアと神はたこ焼き談義をしている。

神「しかもワイはな！食べるのも好きだが作るほうが好きなんや！じゅーじゅ 焼くあの音とあの触感を作り出す感覚がとっても好きなんや！」

ネプギア「そ、そうですか」

人が変わったかのようなしやべり方をする神にネプギアは少し引く。

神「それにな、ワイは何時か究極のたこ焼きを作るのが目標なんや。いつちよ目指したるでー！！」

背景に波しぶきを出して叫ぶ神。

ネプギア「あはは・・・、ところで思ったんですけどもし神様じゃなくなったらどうしてたんですか？」

神「俺様が神じゃなかったら？そうだな・・・出来る事と言えばたこ焼き屋を営んでいたな。愛する妻もな」

ネプギア「たしかに、神を取ったらただにたこ焼き屋さんですね」

神「さり気無くムカつく気がするが・・・」

神はジト眼でにらむ。

神「そう言うお前は女神取ったらどんなことやってたよ？」  
ネプギア「え？」

ネプギアは返事に困った。  
女神ではなくなった自分。  
ただの人間となった自分はどんなことをやっているのか。

ネプギア「・・・分かりません・・・」

神「そうかい、なら将来のこと考えておくんだな」

神はそう言って去っていった。

ネプギア（女神じゃなくて人間の私達：もし異世界にいる英雄達や  
伝説の方々も普通の人としてならどんなことをやってたんだろっ？  
・そして私達は人間だったら一体どんなことをやってたんだろっ  
？）

ネプギアは疑問に思いながら六課へ戻った。

神「たご焼きや!」(後書き)

どうなるだろうね。

井戸子さん「ビデオ…」(前書き)

「しあわせ…ほし…」



井戸子さん「…ビデオ…」

ネプテューヌ「たっだいま」

銀時「遅かったなおい」

ネプギア「いえ、ちよつとした事がありました」

ネプ姉妹が買い物から帰ってきた。

手には買い物した商品と……一本のビデオ。

銀時「なんだそれ？」

ネプテューヌ「これ？髪の長い女の人私たちのファンだつて言つて渡してくれたんだ」

ネプギア「あの人いわく『幸せのビデオ』つていうんです」

姉妹はニコニコしながら言う。

するとビビが一つの質問を投げた。

ビビ「ね、ねえ2人とも。その女の人つてどんな人？」

ネプギア「黒いロングヘアに白ワンピースを着た人です。でも髪が長すぎて顔がよく見えなかつたですけど……」

ビビはそれを聞いた瞬間少し顔を青くした。

ネプテューヌ「じゃあ私たちがちよつと整理してくるから」

ネプ姉妹はどつかへ去った。

ビビは頭を抱える。



井戸子さん」「…ビデオ…」(後書き)

元ネタ

井戸子…まんま貞子です

死合わせのビデオ…呪いのビデオ…こちらもリンググネタ

レーティア「ギルシア〜?」(前書き)

「誰にもこの愛と絆は壊させはしないわ」

レーティア「ギルシア？」

六課の食堂にて

レーティア「ギルシア、そんなに急いで食べないの」

ギルシア「いやなに、レーティアの手料理を思うと無性に食べたくなっただけだ」

レーテョア「あら嬉しい。じゃあ愛弁当持ってて正解だったわ」  
全員（持ってきたんかい！！！！）

レーティアとギルシアが互い向かいあって食事している。

ちなみに女性人男性人は2人を監視しながら食べている。

ギルシアは弁当を開けた。

ギルシア「お？日本弁当（ご飯の真ん中に梅干しを入れたあれ）をハート型にしておかず付きか」

レーティア「だって、梅干しにしようかと思ったんだけどギルシアの愛が伝わらない気がしてタラコでハートを作ったんだもん」

頬を赤く染めてもじもじするレーティア。

それで萌えたと言う男がいたとか。

取りあえずギルシアが一口。

ギルシア「む？この塩味と食感！行けるぜ！！」

レーティア「ほんと！？良かった！貴方のために愛を注いだのが大正解みたい！！」

レーティアは抱きつく。

嫉妬の邪念がどんどん増していく。

レーティア「ギルシア……」  
ギルシア「レーティア……」

（以下繰り返し）

その時2人の空間からピンク色のオーラが現れ、範囲内にいる方々は苦しんでいる。

銀時「ぐおおおおおおおおお！ なんじゃこりゃああああ  
！！！！」

土方「か、体が、おされていくううう！！」

ビビ「ぐあ、胸が苦しい……」

グレイ「……………」（手に血が出るほど握りしめている）

ジャンヌ「こ、これは超愛フィールド！ 愛パワーが一定以上達すると発生する邪念を追い払う特殊なパワー！」

新八「すでに彼ら以外吹き飛ばされてるんですけどおおお！！！！」

ギルシアとレーティア以外どんどん離れていく。

リル「あう〜」

娘を除けば。

レーティア「あ〜、よしよし。一緒にいい家族をつくりましょうね  
〜」  
ジャンヌ「愛の力は計り知れないものね」

愛とは恐ろしかったりすごかったりと無限であったりするのだった。

ただ銀時はそれをこなすのは長くなるだろう。

レーティア「ギルシア〜？」（後書き）

愛ってすごいものだと思いますよ！BYフロン

アリサ「まったく・・・」(前書き)

「あたしがしっかりしないとね」



アリサ「まったく・・・」

地球・アリサのコテージ

ネプギアとアリサとさすがが会話している。  
ちなみに彼女は興味本位でここに来ただけ。

ネプギア「アリサさんもさすがさんもお金持ちなんですか？」

アリサ「まあね、あたしこつみてもパーフェクトファンリガルだも  
ん」  
「さすが「私の場合はなんやかんやてきな・・・」

アリサは自慢げに、さすがは困った顔している。

ネプギア「そうですか。ベールさんといい勝負かもしれないね」

思わずつぶやいたネプギアの一言にアリサは突っかかる。

アリサ「ちょっと待ちなさい、いいとこ勝負ってどういうこと？」  
ネプギア「い、いえ！ただベールさんもお金持ちみたいで良く部屋  
に高額な絵とかゲームを置いてたりしてるんです！」

ネプギアは慌てて弁解。

アリサ「高価な絵にゲーム？」

ネプギア「金色のがく淵付きの絵にゲームがたくさんあるんです。  
でもベールさん曰く「この部屋で5%程度ですわ」っていてました」  
アリサ「どんな部屋よそれ！！」

アリサはシャウトする。

ネプギア「それに柄が500枚でゲームが全種で1000以上あるってベールさん言っていました」

すずか「…言葉が出ないくらいすごいんだね…」

すずかは本当に反応に困った。

アリサ「どういう御令嬢さんか知らないけど、お金を自分の娯楽のために使うのはもつてのほか！そうよねすずか！」

すずか「え？あ、うん」

アリサ「なら話は早いわ。私そいつに説教してくる！」

アリサはダツシュでベールに会いに行った。

すずか（い、いえない。お金で猫をもっと買おうだなんて言えないよ…。可愛いし）

すずかはそんなことで思い悩むのであった。

余談だが、ベールはアリサに注されたにもかかわらず全然反省していなかったらしい。

ベール「（ベールにとって）三種の神器を止めるのはありえないですわ」

何とも強情な人であった。

アリサ「まったく・・・」(後書き)

アリサとシャルマルは髪の毛的に似てると思っス。

「ヴィヴィオ」よし！」(前書き)

「私も強くなるよ」

「ヴィヴィオ「よし！」」

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！面白い本を見つけたんだけど！」

ネプテューヌ「面白い本？どんな？」

ヴィヴィオ「ある魔法少女が宇宙を救ったって話」

ヴィヴィオが一つの本を持って語る。

ヴィヴィオ「その昔ある一人の少女がいました。その少女は普通の中学生でみんなと仲良く暮らしていました。すると白い生き物が現れて『僕と契約して魔法少女になってよ』といいました。けど別世界から来たある少女が契約するなど忠告。ですが少女は世界を守るために魔法少女となって魔女を倒し、自分の実を犠牲にして魔女を全て根絶やしにしました。だって」

ネプテューヌ「ふん」

ネプテューヌは興味ありそうな顔をしている。

ネプテューヌ「じゃあヴィヴィオはその子の名前分かる？」

ヴィヴィオ「そのこは・・・」

とある世界

????「ホーリーアロー!!!」

モンスター「グゴオオオオオオ!!!」

ピンクのツインテにいかにも魔法少女っぽい少女がモンスターと対峙していた。  
そして撃退。

「……世界に混沌が浸食している…早く何とかしないと…」

少女は弓を握りしめて思いを溜めていた。

「……ほむらちゃん」

ヴィヴィオ「よし！」（後書き）

元ネタ

白い生き物：QBである。セリフも。

別世界のある少女：彼女の友達の時使いだと。名前はほむら

????：分かる人には分かるはず

岩沢「音楽なう」(前書き)

「・・・いい音色だ」



岩沢「音楽なう」

ネプギア「へへ、そういうことだったんですか」

岩沢「ああ、私にとって音楽はすくいだと思ってるんだ」

ネプギアと岩沢は音楽のことで話し合っている。

岩沢「そうだネプギア。一緒にガルデモやらないか？」

ネプギア「え？い、いいですよ。わたしなんて・・・」

岩沢「遠慮するな。加わればまたいい人気が出るかもしれないし」

ちよっぴり強引な岩沢。

岩沢「さあネプギア！ハンドを始めよう！」

ネプギア「決定事項なんですかああ！！」

数時間後：

ネプギア「いえ〜い！みんなのってるか〜い？」

完全にノリノリなネプギア。

手にはエレキギター。

岩沢「やるじゃないかネプギア！あたしも負けてられないな！」

岩沢も闘心に火がついた。

後ろの4人は啞然としていた。

ひさ子「あいつ、結構乗りいいな……」

入江「ノリがいいとはまっちゃんだ……」

関根「あそこまで豹変してるね……」

ユイ「ぬぐぐ……岩沢さん……」

そうこうしていると、

ネプギア「あ、思い出したことがありました」

ピタッと止めるネプギア。

ネプギア「実は私達の世界で音楽で人を救おうとしている人がいるんです」

岩沢「お？それはいいことだ。だれなんだ？」

ネプギア「5pb.さん、アイドルだそうです」

岩沢達はおお〜という。

ネプギア「ただ、あの性格が問題ですけど……」

岩沢「あの性格？」

ネプギア「5pb.さん、ああ見えて極度の人見知りだそうです」  
ガルデモ「……………」

ネプギアの発言に沈黙する。

岩沢「は？人見知りか？」

ネプギア「ハイ…、初めて会ったときに避けられたことがありまして…」

ネプギアは思い出して暗くなった。

ひさ子「人見知り激しくて何でアイドル？」

ネプギア「スイッチが入っちゃうと紛らわせるそうで、でもプライベートは駄目だそうです」

入江「な、難儀ですね…」

ユイ「アホですね」

## ゲーム業界

5pb・「クシユン！今誰かが僕の噂をした様な…」

と鼻をすするのだった。

岩沢「音楽なう」(後書き)

世の中そんな人もいる。

面白武器商人「安いよ」(前書き)

「俺の商品はいいぜ」

## 面白武器商人「安いよ」

武器商人「ようようそこのお譲さんとお兄さん達」  
ネプギア「へ？私達ですか？」

商人に呼びとめられるネプテューヌら女神組と銀時ら万事屋組。

武器商人「あつしは宇宙を旅する商人でさア。異世界からかき集めた武器を買ってみてはいかがかな？見てるだけでもいいがな」  
神楽「変わったもんがいっぱいあるアルな」

神楽が商品を見ている。

ちなみに商品は以下の通りだ。

オンボロソード：ただの錆着いた剣。それだけ。

グギユの杖：この馬鹿犬と言わないで！

マスケットガン：おもちゃと舐めてたら痛い目に会いますわ

恐竜の舌：実は2メートルも伸びるかもしれないもの。

星の杖：だからって願いがかなうわけがありません

マジックジェム：これを持って魔法少女に…なれるか！

魔王少女の服：魔王じゃないもん！つと声が聞こえた気がする。

大泥棒の銃：あの男の所持していた銃です。

ビームブレード：シュン、って言ったら光線剣が出ます

亀王の甲羅：ふんだらいやよ

裏ムエタイのハチマキ：ヤア！アパチャイだよ！

ビッチガン：ビッチな女の下心…。

兄の赤帽子：かぶると勇氣100倍に！

弟の緑帽子：かぶると目立ちにくくなるそうです

墮天使の刀：とある墮天使が持つとされる長刀。

ネプテューヌ「すごそう…でも見てるだけでいいや」  
武器商人「あっそ」

そして一通り見た後帰りました。

面白武器商人「安いよ」（後書き）

元ネタ

グギユの杖（ゼロ魔）：ツンデレ魔法使いさんのです。

マスケットガン（まどマギ）：あのやられキャラの愛用銃です。

恐竜の舌（ヨッシー）：やっぱりこいつでしょ

星の杖（マリオストーリー）：レプリカです。ありがとうございます  
した

マジックジェム（まどマギ）：魔法少女の魂が宿っています。

魔王少女の服（リリカルなのは）：分かる人には分かるあの服

大泥棒の銃（ルパン）：伝説の大泥棒ですよ

ビームブレード（スターウォーズ）：良くある武器です。

亀王の甲羅（マリオ）：宿命のライバルさんです

裏ムエタイのハチマキ（ケンイチ）：危ない男のハチマキです

ビッチガン（パンスト）：パンツが銃に…

兄の赤帽子（マリオ）：お馴染みのあの帽子



弟の緑帽子（マリオ）：「兄さんだけずるいや」

堕天使の刀（FF7）：セフィロスの愛剣

ラム「えへへ」「ロム」・・・」(前書き)

「みんなもたっち」

「たっち...」

ラム「えへへ」「ロム」・・・」

六課にロムとラムの保護者ミナが来ている。

ミナ「ご無沙汰していますみなさん」

ネプギア「ミナさん、どうしてここに？」

ミナ「すみません、保護者としてあの子たちが心配で・・・」

はやて「大丈夫やて、あの子ら元気にやってるよ」

ミナ「いえそうではなくて・・・」

皆はちらつと2人を見る。

ブラン「テメエら・・・！人の顔に落書きしてんじゃねえエエ！！！！」

銀時「あああああ！！俺のジャンプが全身真っ黒にいい！！」

新八「ぎゃあああ！！お通ちゃんが全身真っ黒クロスケに！！」

ジャンヌ「コスプレ衣装が！」

ギルシア「目の前が真っ暗だ！！」

ラム「わっい、みんな面白〜い」

ロム「・・・面白い・・・」

早速被害にあっている面々といたずらした2人。

ミナ「ああいうありさまで・・・」

はやて「ああ、そう言うこと・・・」

はやては冷や汗をかいた。

なのは「2人とも、悪戯してないで勉強したら？」



後日、2人は絶対になのはに逆らわないことを誓ったそうだ。  
トラウマを魂深く刻まれて。

ラム「えへへ」  
「ロム」・・・  
「（後書き）」

親強しです。

キラーマシン」・・・」(前書き)

「ワタシハメイレイニシタガウダケ・・・」

キラーマシン「……」

ネプギア「きゃあ！」

ネプテューヌ「ネプギア！」

ネプギアが何者かに吹っ飛ばされた。

そいつは空中に浮き、灰色の体に赤いライン線のある機械兵器・キラーマシンである。

ラム「おかしいわよ！なんでルウィーで封印されたやるがこんなところに現れるわけ！！？」

ラムの言うには昔犯罪神マジエコンヌが作ったとされる大量殺戮兵器キラーマシン。数は数百以上はあると言われている。現在ルウィーのゲームキャラが封印してあるはそのうちの一体がここにいるのだ。

銀時「どつちにしろ倒さなきゃ意味ねーだろ！！！」

なのは「銀さん！私達も援護するよ！」

銀時が駆け出してなのは達も援護する。

キラーマシンは目を光らせ、右手の斧を振り下ろそうとして神楽がキックではじかれる。

神楽「ミッドチルダの女王神楽様が相手ネ！！！」

キラーマシンは負けじとモーニングスターで攻撃する。



なのは「今だ！ダイバインバズーカ！！」

なのはは隙をついてモーニングスターを破壊した。

ネプテューヌ「トドメは…」

ネプギア「私達です！」

銀時「いくぜ！」

ネプ姉妹と銀時が駆け出す。

銀時・ネプ姉妹「でやああああああ！！！！」

3人はキラーマシンを真つ二つに切った。

キラーマシンは機能を停止した。

ノワール「倒せたわね」

ベール「でもどうしてこんなものが…」

神楽「きつとはぐれもんアル」

新八「神楽ちゃん、野生動物じゃないから」

神楽の言い分に新八が突っ込む。

神楽「何言ってるアル。機械も野生になるね。だからお前は駄眼鏡

アルよ」

新八「んだとおおおお！！」

新八が切れた。

銀時「いや神楽の言葉も一理ある。なんせキラーマシンだからな」

そう言って想像したのはドラクエの奴らだった。

新八「なんでだよオオお!!」

新八のツツコミがこまりました。

キラーマシン」「・・・」(後書き)

機械って野生になるんですね。

シナ「良い景気じゃ」「(前書き)

「たのしいな」

シナ「良い景気じゃ」

シナ「よ！ただいまなのじゃ」

動物達「お帰り園長！」

シナが巨大な袋を持って帰ってきた。

ネプギア「園長…また変なもの拾ってきましたね？」

シナ「変なものとは失敬だな？」

シナは出かける際面白いものを拾ってくるのが多い。

ネプギア「で？今回何拾ったって言うんですか？」

シナ「こいつじゃ」

????「きゃ！」

シナが袋を開けると人が出てきた。

いやその人は体がでかい。

しかも下半身がインクの鱗を持つ魚だ。

????「な、なんですかここは!？」

シナ「ここは王魔時動物園」なに考えてるんですかアアアアア  
!?!?!」

シナが言い切る前にネプギアがドロップキックを喰らわす。

シナ「なにをする」

ネプギア「なにをするじゃないですよ!?!?!なに思いつきり誘拐み  
たいなことしてるんですか!?!」



転生者「あ？人にものを聞くときは自分からの…！！？？」

転生者はふりかえっていく際突然の登場に涙目になっているしらほしと眼があった。

転生者は心を奪われた。

転生者「うおおおおお！！俺はあなたに惚れました！！付き合ってください！！！」

なのは達のハーレムそっちのけでしらほしに告白。

しらほし「すいません。タイプじゃないんです」

ネプギア（そう言う問題！！？）

しらほしの純粋な答えにネプギアは驚く。

ガーーーーー！！！！

転生者はショックを受け、石が砕けたかのように崩れた。

転生者「はは・・・振られた…我が人生始めて振られた…」

そしてネガティブになった転生者はとぼとぼどっかへ去った。

ハーレムは諦めて。

シナ「ワハハハハハ！実に面白い！しらほし！面白ことやるうぜー！」  
しらほし「はい！（ニコニコ）」

ネプギア（大丈夫かなこの動物園…）

ネプギアは純粋なしらほしを姉と重ねているのだった。

あと他にもハーレム希望者が出たが、しらほしが断ってみんなハーレムを諦めたと言う。



シナ「良い景気じゃ」(後書き)

天然なのか純粹なのか？

桃子」「しぶぶ・・・」(前書き)

「面白いことになるとついちょっとかい出したくなっちゃうのよ……」

桃子「うふふ・・・」

地球・海鳴市・翠屋

ネプテューヌ「うん、このケーキ最高!!」

桃子「あら、それは良かったわ」

ネプテューヌがケーキを食べ、桃子は嬉しそうにする。  
すると桃子はネプテューヌに聞いた。

桃子「で、ネプテューヌちゃん。最近彼氏で来たって聞いたけど・・・」  
ネプテューヌ「え?・・・うん／＼／＼／」

ネプテューヌは彼氏という単語に顔を赤くする。

桃子「その反応…まさかいるのね!誰なの!？」  
ネプテューヌ「え、えと…その…」

ネプテューヌはたじたじた。

ネプテューヌ「ぎ、銀さん…だよ／＼／＼／」

士郎、恭也「なにっ!？」

桃子「あら」

真っ赤な顔でネプテューヌはいい、士郎と恭也は反応し、桃子は小悪魔のような顔をする。

銀時「おいネプテューヌ、こんなところにいたのか？」

知ってか知らずか絶妙なタイミングで銀時が現れた。

恭也「おい」

銀時「え？なに？」

士郎、恭也「こつちへ来い！うちの道場で説教してやる！」

銀時「なんでだアアアアアアアアアア！！！」

銀時はずるずると引きずられていった。

ネプテューヌ「桃子さん、もしかして面白半分でいつてない？」

桃子「さあ どうでしょう」

桃子の本質がよく分からないネプテューヌであった。

某赤いスーパースターでも翻弄させそうな彼女であった。

ちなみに恭也と勝負にあった銀時は一応勝ちました。

シスコンは負ける運命。

恭也「シスコンいうなアアアアアアアアアアアア！！！」

桃子「うふふ・・・」(後書き)

シスコンめ。

恭也「違つわ・・・」

リル「ばぶ」(前書き)

「(早く大人になりたい)」

リル「ばぶ〜」

みなしゃんこんにちは、ねーていあままのむすめのリルでしゅ。

レーティア「リル〜？元気にしてた？」

リル「ばぶ〜！」

このひとがねーていあままでしゅ。

となりのごついおとこがギルシアパパでしゅ。

ギルシア「今ごついって言われた気がするが…」

レーティア「気のせいよ。さあリルちゃん？ご飯の時間よ〜」

リル「う〜」

ちなみにわたしにこうぶちゅはねーていあままのみるくでしゅ。

あのおじはうまかった。

そののましゅまるきゅうのやわらかさもぴかいちだったでしゅ。

ネプテューヌ「レーティア〜 ご飯の時間だよ〜」

レーティア「ああ、ごめん、今リルのご飯あげてるから後で」

あらわれたのはみためがきのくせしてめがみづらしてるねぶてゅーぬでしゅ。

そのうしろにははくはつぼさばさのあたましたくそおとこがいるつしゅ。

銀時「んなもん後でいいだろ？」

レーティア「だめよ。リルの機嫌を損ねるのは母親として駄目なのよ」

ままはわたしのみかたでしゅ。  
けどばーま、てめえはだめだ！

銀時「そうかよ。ったくホント嫌な奴だな」

ムカツ

いくらわたしののうりよくでひどいめにあったからってちよつじに  
のりすぎでしゅ。

いっばつこらしめるっしゅ！

リル「ばぶっ！」

ドゴスツ！

銀時「あべしっ！？」

ネプテユーナ「銀さん！？」

ふははは！さいこきねししゅでぐーぱんちしたでしゅ。  
ざまあみろでしゅ。

もうじこくはよるちかいでしゅ。

レーティア「銀さんったら本当に赤ちゃんに対して冷たいのね」  
ギルシア「そうだな。あいつトラウマもんでもあるのか？」



とらづまはありえないでしゅ。  
きつとわたしのよなあかちゃんまかされてひどいめにあったとお  
もうでしゅね。

レーティア「そんなことよりギルシア」 またやろつよ！  
ギルシア「・・・たくしょうがねえな」

こうしてはばとままはしゅうにいちどきしあんしるんことがおおいつ  
しゅ。

みているみにもなつてほしいでしゅ。

とはいってもわるいきはしないっしゅ。

リル「ぶ〜）もうねよ・・・」

わたしのいちにちはおわりでしゅ。  
おやすみ〜。

リル「ばぶ」(後書き)

ひらがなばかりでごめんなさい。

「プリア」どころも「前書き」

「またプリアです」

「プリア」どうも」

「シャマル」大変、薬を切らしてしまっただわ」

「プリア」痛み止め買ってあげましたよ」

「シャマル」え？あ、ありがとう」

「スバル」アイスが食べなくなっただ」

「プリア」5段フルーツアイスですけど」

「スバル」え！？ありがとう！」

「レオン」丸太が足りんな」

「プリア」用意しますね（バッグから丸太が出る）」

「レオン」・・・そのバッグは四次元ポケットか？」

「シャル」お腹空いたな」

「プリア」食べ物ありますよ？（バッグから大量の食べ物が出る）」

「シャル」ありがとう！（っていうかあのバッグでよく入ってたわね  
…）」

「はやて」ここまで便利な子は初めてや」

「プリア」当たり前です。備えあれば憂いなしが僕のポリシーですか

ら

今まで準備のよいことにはやてとプリアは話し合う。

はやて「でもさすがに一人で働き過ぎはよくないで？」

プリア「・・・分かりました。親衛隊、前へ！」

プリニー「只今参上ッス！」

プリアの号令にプリニー達が現れる。

プリア「僕はしばらく休むからあとよろしく」

プリニーズ「了解ッス！」

プリニー達は敬礼する。

はやて「やっぱりプリア君は便利やなあ……」

いろんな意味で万能なプリアに感心するはやてであった。

プリア」「どうも」「後書き」

ある意味すごい奴だ。

ガレーナ「フフフ・・・」(前書き)

「新たな戦術で挑もうか」





その拳の一つ一つの衝撃が星に影響を及ぼしている。

レオン「楽しいぞ！やはりここまでいくとはな！」

ガレーナ「ああ！余も楽しい！ここまで心踊れるのは主がいてこそだ！」

笑みを絶やさず、激しい拳の打ち合いを続ける。

レオン「余興はここまでだ！最後の力で！」

ガレーナ「よかるう！受けて立つ！」

レオンは青い力を、ガレーナは赤い力を最大限にため、

レオン「獅子王神破！！」

ガレーナ「紅蓮神龍拳！！」

お互いの最終奥義をぶつけ合った。

その頃ミッドで、

ドドドドーーーーー！！

新八「ぶはっちっちっち！（飲んでたお茶を拭きだした）な、何事ですか！？」

はやて「この反応…次元震や！グリフィス！」

グリフィス「はい！管理外世界16 34番からの反応が来ました

！」

次元震が現れた事に戸惑う。

だがみんなが慌てる中でリアス、チフユだけは呆れた顔をしていた。

銀時「？お前らどうしたよ？」

リアス「いや、べつに……」

チフユ「その馬鹿地震を起こしたやつらを知ってるんでな」

チフユがいい捨てるのと銀時達は「あ」と顔を合わせていった。

で、一つの星がぶっこわれていて、その星をぶっ壊した張本人達はどうと、

レオン「……やり過ぎた……」

ガレーナ「アテナスにどやされるな……」

その後2人はアテナスにきついお叱り（という名の10億ボルト攻撃）を喰らい、壊れた星は彼女が直しました。

ガレーナ「フフフ・・・」(後書き)

このままいったらスーパーサイヤ人を超えちゃいそう…

サチ」「エ入々・・・」(前書き)

「おほいおほい」

サチコ「エへへ・・・」

機動六課の入り口からある少女が現れた。

サチコ「銀時、遊びに来たよ」

銀時「ギヤアアアアアアアア！また出やがったアアアアアア！！！！」

銀時はサチコから逃げる。

サチコはそれを追いかける。

これは何時ものこと。

ネプテューヌ「いつも来るね」

ネプギア「私もう慣れました」

そしていつものように食事するネプ姉妹含む全員。

サチコ「あ、そうそう、みんなにも私のお友達が来てるから」

ネプテューヌ「友達？雪ちゃんたちかな？」

ネプテューヌは軽い気持ちで外を見る。

・・・目から赤い血を流した青白い人たちがいる。

レオン「誰だサイレンのゾンビキャラ連れてこいつて言ったのは？」

サチコ「連れてきたのサチコだよ」

老婆？「サチゴちゃんはげんきがね？」

サチコ「元気だよ」

老人？「ぞうがぞうが」



サチコ「エへへ・・・」(後書き)

サイレンとコワイシャシンをだして見た。

動画でみた程度ですが。

リル「アウ」(前書き)

「(こんな能力もある)」



リル「アウッ」

こんにちは、リルでしゅ。

いまわたしはあるちからにちょうせんしてるでしゅ。

リル「うっ」

ぴかーーーーー!!!

光がはれるとそこには特徴的なくせ毛の生えた紫の髪に紫のワンピースを着た少女だ。

ついに成功です！私は人体成長魔法を習得出来ました！  
なんでこの姿になったって？それは私の挑戦心があるからだよ。

リル「さて、ママ達にも驚かせてみようかな」

スキップしながら部屋を出ようとする。

銀時「おっい、ガキンチョいるか？…ってだれだ？」

リル「げっ！？腐った白ヘアー！」

銀時「オイコラ、誰の頭が腐ってるって？」

なんてこと・・・この姿の初対面があのかソテンパーだとは。  
私個人としてはあのかときなかせた恨みが残ってるもん！

リル「あんたのそのぐしゃぐしゃした頭よおじさん」

銀時「テメーに天然パーマの苦しみが分かるかあああ！！！！しかも

俺はおじさんじゃねえ！！お兄さんと呼べエエ！！」

リル「じゃあ何歳？」

銀時「……………さあ？」

しらねえのかよ！！コイツホント馬鹿か！？

つとそうこうしている間に誰か来た。

フェイト「銀時、なにをそんなに怒鳴ってるの？」

コイツ確かフェイトって言ってたっけ？自称クソパーの妻で…

(ピコン！) いいこと閃いちゃった

リル「きゃー！怖い白いおじさんが私をさらった！(棒読み)」

銀時「おiiiiiiiiiiii！！何言ってるやがんだデメエ！！」

あんたを地獄に陥れるために言ってるんだよ。ホラ、妻さんがお怒りだよ。

フェイト「銀時、なに子供相手に怒鳴ってるの？」

銀時「いや違うんだよ。こいつは……………」

リル「私悪くないよ」(嘘泣き)

フェイト「銀時？お話ししようか？」

フェイトさんはあのもじゃパーをドナドナ連れて行く。

ハッハッハ、ザマアミロ。

レーティア「何かしら騒がしいと思ったらそういつごと…」

声が聞こえたので振り返るとママがいた。

私は思わず胸の中にダイブ。

リル「ママ〜ン・・・」

レーティア「くすぐったいわよリル。やっぱり私の娘ね」

嗚呼、この柔らかさとおい、私は幸せだ。

っていつかすでに気づくなんてさすがママだね。

遠くである男の声が聞こえたけどそんなのキニシナイ。

私はちつと生体変化能力で姿を大人に変えた。

・・・ちよつとママより胸が大きい？

レーティア「あら？その姿にもなれるのね。でも少し嫉妬しちゃいそう・・・」

リル「ふふ、ママの方がきれいですよ」

ママと同じ視線でいるのって少しいいかも。でもやっぱり子供形態でいいや。

リル「やっぱりこっちの方がしっくりくるや」

ま、いつでも大人になれるけどね。そんな時ギルシアパパが出てくる。

ギルシア「レーティア、どうし・・・ぬおっ！？なんだこの激萌美少女は！？カメラは何処だ！？」

パパは私の様な子供が大好きだったな。まあしばらくこのままでいよう。

銀時「あゝ、だるダボンベツ!？」

・・・聞きたくない声が聞こえたから思わずサイコパンチで殴っちまった。

あやまれ?だが断る!

さて、次はどんな遊びをしようかな、ウフフフフ・・・。

リル「アウ〜」（後書き）

書いてて何気に恐ろしい…。

ラハール「くそ・・・」(前書き)

「いい加減ムチムチを近づけるな！」

ラハール「くそ……」

俺様はラハール。

どんな悪魔でも一目置く魔王だ。

だが俺様が魔王でもどうも苦手なものがある。

レーティア「ラハール君」

ラハール「うわ！近寄るなムチムチ！」

それはムチムチ女だ。

あんなプルプル揺れる肉の塊なぞ滅せればいいものを…。

レーティア「酷い…私にそんな挨拶するなんて…」

ラハール「ぬぐ……」

少し傷つけたな…。

だが仕方が無かるう。

俺様にとってはトラウマの一つなのだ。（ドラマCD参照）

俺様もいろいろ努力して何とか触る程度になったがやはり苦手意識が出てしまうう。

チフユ「心の傷はそう簡単には治らん。慣れることが大事だからな」

レオン「一理あるな」

ガレーナ「余もじゃ」

タバネ「ラハールちゃん可哀想ですね」

ラハール「……これは俺様をいじめているのか？」

ラハールは眉をひそめる。

この六課やギルドメンバーはほとんど胸が大きいしムチムチだ。  
ラハールにとって地獄場でしかない。

リル「ラハールう」

ラハール「うわ！」

後ろから抱きついたやるは確か悪魔女レイティアの娘のリルだ。  
しかも大人形態だからムチムチだ。

ラハール「だー！！引つ付くな！！」

リル「いやよ。私もつと抱きつきたい」

リルは能力で絞める力をあげる。

グオオ苦しい。た、体力が持たん…。

しかもムチムチが当たっているからなおさらだ。

レイティア「リル、苦しそうだからはなしなさい」

リル「は〜い」

運よくレイティアがはなしてくれた。

しかしダメージもあってか足取りがふらふら。

それに顔も青い。

もう限界かと倒れかかる。

ポニユ

ラハール「ん？」

目の前に柔らかい感触がした。

顔をあげると、黒髪の女性・グレイ・ステインだ。



グレイ「・・・なにをしているの?」

無表情のようだが若干の怒りが込まれているように見える。

ラハール「こ…ここまでか・・・ガクッ」

ラハールは気絶した。

グレイ「なんだよ…」

リル「ラハールは胸のおつきい人が苦手みたいなんだよ」  
グレイ「・・・」

グレイは少し複雑な気持ちになった。

ラハール「くそ・・・」(後書き)

ある程度は克服。しかし苦手意識が出ることは変わりません。

レーティア「守るわ」(前書き)

「私の娘には指一本触れさせない!」

レーティア「守るわ」

リル「ス〜」

レーティア「ウフフ、可愛いわぁ」

リルをだいてミッドチルダを散歩している。

レーティア「ん〜、リルちゃんのお肌すべすべね〜、マシユマロみたいにかわいいかも。チュ」

リルに対してもイチャイチャするレーティア。

対するリルはいやがる様子はない。というかねているだけです。

???「よう姉ちゃん？可愛いねえ、俺らと遊ばないかい？」

とガラスの悪い見た目が不良ですと思わせる男達が囲んでいました。数は6人。

不良「お姉ちゃん子持ちか！？しかも人妻？やべ！俺興奮してきた」  
不良「しかもなんてグラビアアイドル級の体付きなんだ」

不良「ヘッヘッへ、姉ちゃん、大人しく俺らを慕った方が身のためだぜ？」

レーティアを見て興奮する不良とナイフで脅す不良。

本来なら一秒とかわからず片付けられるが、リルがいるのでは手出しができない。

レーティア「・・・分かった、煮るなり焼くなり好きにしなさい」  
不良「っうおし！！それじゃあこっちこいよ」





で…

ギルシア「なにになに？『強姦不良グループ逮捕　そして半ミイラ化のなぞ？』」

ギルシアが新聞を呼んで疑問に思う。

レーティア「怖いわねえ…、でも逮捕されて良かったわ」

ネプテューヌ「でもさあ、こいつらまるでサキュバスにでも襲われたかのようにげっそりしてるよ？なにがあっただらう？」

レーティア「なにが起こったか分からないわね。そうよねリルちゃん」

リル「あ〜う〜」

と何事もなかったかのように平穏なまままでいく親娘おやめであった。

レーティア「守るわ」(後書き)

一応リルはレーティアの血が混じってるからね。



アンヘル「ひまだ・・・」(前書き)

「遊び相手はおらぬか？」

アンヘル「ひまだ・・・」

アンヘル「・・・・・・・・」

カイクの相棒で赤いドラゴン・アンヘルはそわそわしている。  
簡単にいえば暇なのだ。

アンヘル（こつ暇では落ち着かん。適当な奴らに罵らせてやるか）

早速ネプ姉妹が来る。

ネプテューヌ「あ。アンちゃんおっはよ」

アンヘル「煩いぞ紫、それから次にそんな名で呼んだら首から上が  
がっばりなくなること覚悟しておけ」

ネプテューヌ「うわ、なんつう威圧のある脅し文句」

いらつと着たアンヘルが毒舌を言うとネプテューヌは冷や汗を流す。

ネプギア「悪気はない……………と思いますけど」

アンヘル「ふん、この薄紫のように大人しくすれば良いものを」  
ネプテューヌ「む、失礼だよ！」

ちなみに紫はネプテューヌ、薄紫はネプギアとなっている（髪の毛  
の色で）。

アンヘル「時に黒とチビ黒はどうしてる？」

ネプギア「ノワールさんとユニちゃんなら2人で競争してるんです。  
ってどうかそのユニちゃんのあだ名変えられませんか？」

アンヘル「断る」

アンヘルは真っ先に拒否。

黒はノワール、チビ黒はユニとなっている。

アンヘル「まあよい、む？カイクメ、また女子どもに囲まれておるわ」

ネプギア「分かるんですか？」

ネプテューヌ「そりゃあがいがいだ相棒しているから心は一心同体なんだよ！」

アンヘル「・・・間違っではおらん」

契約によってパートナーとの状況が読めるのだ。

ネプギア「あ、いけない！今日なのはさんが模擬戦する日でした」

ネプテューヌ「あ、そうだね。じゃあアンヘル、またね」

アンヘル「さっさと行け馬鹿もの」

アンヘルはやはりというべきが毒舌。

その表情は豊かに見える。

アンヘル「話し相手が出来たから落ち着いたわ」

ちよっぴり嬉しいアンヘルであった。

アンヘル「ひまだ・・・」(後書き)

真王「ドラゴンは偉そうので偉そうな種族です」

ラム」「むかつく」「ロム」「・・・」(前書き)

「いやなこと思い出しちゃっわ」

「・・・ブルブル」

ラム「むかつく」「ロム」・・・」

ギルシア「ヴィヴィオたん！これでもかというくらいだいてもいいか！？」

ヴィヴィオ「あ、えっと・・・」

なのは、フェイト、ビビ、ネプテューヌ

「断固阻止！」

ギルシア「チッ」

やはりいつもどおりな風景。

ギルシアがヴィヴィオに手をわきわきさせて、なのは達に威圧で止められた。

ラム「むぐ、あいつ見てるとあの変態を思い出すわ・・・」

ロム「嫌い・・・」

双子はとあるあいつを思い出して言う。

フェイト「変態って？」

ラム「変態は変態だよ！あいつからでつかい癖してあたし達に様なことちやい子供が好きなんだよ！それに、あ、あいつから体舐められた恨みがあったし・・・」

ロム「・・・ブルブル」

ラムとロムは思い出しただけで寒気を感じた。

フェイト「な、なめ！？・・・なんて破廉恥な！？」

ラム「破廉恥デ済むとおもっ!？おかげで心に汚い思い出が出来ちゃったよ!」

ロム「…もういや…」

はやて「ほほっうっそれは興味深い話やなあ…」

はやては身を乗り出した。

すると保護者のミナがやってくる。

ミナ「二人とも、おふろの時間ですよ」

ラム「わっいおっ風呂っ!」

ロム「ラムちゃん、あらいつこしょ…」

ミナ「フフ、そうですね。では全身に舐めまわすように洗い合いましょっ」

ミナとラムとロムはシャワー室へ去っていった。

………ん?

フエイト「あれ?ミナ…さん?あれ例えだよね?」

はやて「なんや?ミナさんってそんな趣味が?」

フエイトとはやてはそう考えるのであった。

ラム「むかつく」「ロム」・・・」(後書き)

ミナ「って実は百合観察者だったり？」

ミナ「違います」 実際凶星



プリニート「プリニーツス」(前書き)

「プリア様について行くッス！」

プリニー「プリニーツス」

プリア「せいれ〜っ！」

プリアが号令をかけるとプリニー達が集まって十行十列に並ぶ。

プリア「敬礼！直れ！礼！」

プリアの指示にプリニー達は従い、みんな一緒にそろって動く。

なのは「プリアくん、何やってるの？」

プリア「プリニー達の朝の号令です」

近くから聞いてたなのはが言うとプリアは言う。

プリア「僕は一人前のプリニーにさせるため、この1000匹のプリニー達を教育してるんです。それもヴァルバトーゼ様のおかげですけどね」

なのは「ヴァルバトーゼ？確かプリニー教育係の……」

プリア「僕はもともとあそこにプリニーでしたから……」

プリアが言う。

プリア「僕はこうやってプリニー教育係を務めています、ヴィヴィオの護衛をこなすつもりですから」

なのは「嬉しいな〜。プリアくんからそんなことが聞けるなんて……」  
ヴィヴィオ「ホントだね〜」

プリア「うわあっ！！？ヴィヴィオいつの間に!?!？」

プリアはびっくりして後ずさる。

ヴィヴィオ「ついさっき、えへへ、ヴィヴィオちょっと嬉しいかも  
…／／／／／」

プリア「え、あ、うん、そうだね…／／／／／」

ヴィヴィオとプリアはもじもじと顔を赤くする。

なのはこれを見て脈ありだねこれは…と思った。

ふとプリアは横を見るとニヤニヤと笑うプリニー達。

プリア「ちょ！笑わないでよ！お金あげないから！」

プリニー「うええ！！？そんな理不尽ッス！！」

どっちが理不尽だとツツコミたいプリアだがむきになるのは情けな  
いと思った。

プリア「ごめん、それじゃはい」

プリアはプリニー達に給料を払う。

プリニー達は喜んでもらう。

なのは「プリアくん、将来ヴィヴィオを守る騎士になるかな？」

ヴィヴィオ「そうだと…嬉しいな…／／／／／」

ヴィヴィオはプリアの後姿を見てそう思った。

## プリニート「プリニーツス」(後書き)

プリヴィヴィフラグ作ってみた。

Vividでどんな活躍が…あるのか？

レオン「修行だ」(前書き)

「鍛錬は決して怠るな。・・・と師匠からの教訓だ」

レオン「修行だ」

機動六課訓練場

ガレーナ「いくぞレオン」

レオン「いつでもいい」

そこにはガレーナと目隠しをしたレオン。

すると巨大な丸太が彼女を襲うが、レオンはその場を動かず避ける避ける。

まるで丸太が来る位置を把握してるかのように。

ガレーナも同じことやって2人とも合格している。

レオン「ふう・・・」

額の汗を取るレオン。

そこに銀時、ネプギア、新八、神楽、ネプテューヌが現れる。

銀時「イヤあく、精が出てるねえ」

レオン「フン、これくらいではまだ序の口程度だ」

銀時はニヤニヤ笑うが、レオンは切り捨てるように言う。

レオン「だがこれでまた師匠に一步近づいたのも事実」

ネプギア「師匠？」

ガレーナ「ああ、余とレオンの師だ」

レオンとガレーナに師匠というものがいるとは想像しなかった。

レオン「この強さを持つのも全て我が師匠のおかげだ。今やった気配回避のみならず、100キロ疾走、火山渡り、一七山越え、重りをつけて壁キック、更には命綱なしの度胸試しもやったな」

ガレーナ「ああ、思い出せばいい思い出だの」

新八「何処がいい思い出！？傍から聞いてもただの拷問にしか見えねえよ！！」

銀時「つーかお前らの師匠どんだけ過激！？」

拷問にしか見えない修行に新八と銀時は突っ込む。

レオン「なにを言っておる、上空一万キロの綱渡りでも普通だぞ」

全員（レオン、ガレーナ除く）「あれで普通！？」

こちらと師匠の頭は異常だと思つた銀時達。

レオン「師匠は百戦錬磨の真の最強を誇っていたからな。だから私は闘うのさ」

フツ、とほほ笑むレオン。

ネプテユーン「ところで、師匠ってどんな人なのかな？」

レオン「ん？ビルを柔道技で倒せる奴だと思え」

全員「それどんな怪物モンスター！！？？」

やはり異常だと突っ込まざるおえなかった。

「……ツクス！」

「どうしたの？」

「いや、何処ぞのバカ者が妾のことをバカにしているとみた」

「あはは……」

とある森の中で女性2人がこんな会話をしていた。



レオン「修行だ」(後書き)

レオン達のあの強さは師匠がいないと…。

ネプテューヌ「新技発動！」（前書き）

「…って何これ？」

ネプテューヌ「新技発動！」

ネプテューヌ「ネプギアネプギアネプギアーーーー！！！」

ネプテューヌがだだだど部屋に入ってきた。  
当然ネプギアも驚く。

ネプギア「ド、どうしたのお姉ちゃん!？」

ネプテューヌ「フフ〜ん、実はね。私達が協力技を披露しようと思  
ってね」

ネプギア「協力技？」

ネプテューヌ「早速みんなを呼んで！」

訓練場

銀時「で?何でこんなことになったんだ?」

なのは「まアまあ新技をつきあうぐらいいいんじゃないの銀さん」

銀時達が集まっている。

ネプテューヌ「でね、アーでこうすれば…」

ネプギア「い、いいのかなあ……」

ネプ姉妹はひそひそと新技案を話し合っている。  
そして準備が整った。

ネプテューヌ「いくよネプギア！」

ネプギア「う、うん！」

ネプ姉妹が右手をあげる。

ネプ姉妹「我答える、古より蘇りし伝説の剣よ！今ここに姿を現せ  
！」

何か呪文を唱えるとネプ姉妹の前に魔方陣が現れて光が漏れだす。

銀時「こ、これは……」

桂「何と!？」

はやて「ホンマにできよったんかいな！」

プリア「まじっすか!？」

見ている人たちは驚きと関心の声を出す。

そして現れたのは世にも珍しい伝説の剣……  
というよりも白髪グラサンのいかつい顔をした男のような奴だった。

全員「……エエエ……!??」

近藤「え`え`え`!!?松平のとつつあん!!?」

全員揃って啞然とした。

ネプ姉妹でも呆れる始末。

ネプテューヌ（ええ~~~~!!?なんで!?!?何で剣じゃなくて人おお  
!?!）

ネプギア（いや、これ人の姿をした剣だよ……多分）



ネプテューヌ「新技発動！」（後書き）

原作のネプテューヌMK2でおっさんの剣で振り回すシーンがあった。

「(じじい)かな」

「(おま)」

リル「うう〜」

リル「う〜ん…」

おはよう…っと言えはいいのかしらね。

私はリル、レーティアママの娘よ。

今大人化してるけど。

リル「う、うう〜ん！まだ少し眠いフア〜」

まだ寝足りない感じである。

レーティア「ふあ〜、リル、おはよ〜」

リル「おはよう…：…レーティア母さん」

大人化の状態ではママではなく母さんと呼んでます。

見た目は立派なレディなので子供じみた呼び方は駄目ってま…：母さんが言ってたしね。

リル「着替えようか、母さん」

レーティア「そうね。早くきないと風邪ひいちゃうもんね〜」

…一応言っておくけど私も母さんも裸なんだよね。

裸じゃないと寝ている感じがしないの。（リアスさんもそんな感じだったかな？）



レーティア「みんなおはよ〜」

リル「おはようございます」

なのは「あ、2人ともおはよう」

新八「おはようございます」

イツセー「よおー!」

レシア「おはようございます」

みんな食堂で朝の挨拶。

だが、

銀時「おう、またお前か」

リル「何? いちや悪いのか? このクソパーマ」

銀時とリルが同時に見るや否や相変わらずこのやりとり。

なのは達は苦笑いを出す、レーティアはニコニコ笑っている。

銀時「大体テメーのおかげで俺酷い目にあいまくりじゃねえか。どうしてくれんだこのヤロー」

リル「それはあんたの自業自得でしょうが。いつまでも引きずってんじゃないよ馬鹿パーマ」

レーティア「はいはい、2人とも止めなさい」

これ以上やると(銀時が)大惨事になりかねないと思ったのかレーティアが止める。

リル「む〜、分かったよ母さん」

銀時「へっ、いい気味「バゴオツ!」「ダバラッ!?!?」

リルはしぶしぶ引き下がるが、銀時はほくそ笑いかけてレーティア

とリルのダブルパンチで沈められた。

レーティア「次私の娘にバカにしたら死ぬことより怖いことを受けるのを覚悟しなさい？」

超黒い笑みで銀時に言うレーティア。

周りの黒いオーラは完全に殺意だ。

なのは達は隅っこでガクガク震えている。

レーティア「さ、一緒にご飯を食べましょ？リル」

リル「うん！」

と子供形態に戻ったリルは可愛さ100%の笑顔でいう。

ビビ「やっぱリルちゃんかわええな〜（\*^ ^\*）」

リル「そうかな？」

ビビ「ええ、そのクソパーマはそこでのたれ死ねばいいのに……」

リル「ホント嫌だね」

ビビと意気投合な意見でいう。

今日も一日平和です。（笑）

銀時「俺は全然平和じゃネエエエエエえ！！」

リル」「うう」「(後書き)

ビビリルの仲もよしかな？

アクターレ「俺様はアクターレ！」（前書き）

「伝説のダークヒーローだ！」

アクターレ「俺様はアクターレ！」

機動六課の前

そこに金髪で稲妻のような紫の眉毛をした白いマントの男がいる。

「???」我々は、幾多の敵を倒して伝説の武人、白夜叉を探しに、  
辺境ミッドチルダにやってきた。しかし！たどり着いたのはいい  
が！ここは血も涙もない白い魔王が占拠されていたのだ！」

怪しい実況を無理やり入れているように見える。  
するとひらりとよけたかのように動いた。

「???」危ない！見えない光線だ！やはり白い魔王の攻撃はまさに  
…」  
ネプテューヌ「違うだろオオオオオオ！！！」

ドガッ！

「???」ゴフッ！」

実況中にネプテューヌが横やりを入れた。

ネプテューヌ「アクターレ！何かと実況付けて嘘いわないでよ！」  
アクターレ「でも、魔界中で噂になってるんだぞ。大きな閃光で脅  
したり白夜叉つてやつをぼこぼこにしたりつてさ」  
ネプテューヌ「あながち間違つてないけど…」

男・アクターレはあんまり臆せず答える。

ってというか怖いもの知らずかと。

ネプテューヌ「ってというかさー、アクターレくん確かヴァルっちの魔界で大統領やってるんでしょ？いいの？」

アクターレ「あ、その辺は大統領権限使ったから」

アクターレの答えにネプテューヌは頭を抱えた。

ヴァルバトーゼの魔界に魔界大統領と呼ばれるものがあり、魔界の統治者である。

アクターレ「ふっふっふ、やはりヒーローは忘れたところにやってくるものだな」

ネプテューヌ「あゝ、昔ダークヒーローやってたって言ってたもんね」

アクターレ「フッフ、その通り！まだ俺様のダークヒーロー魂が燃え尽きてはいなかった！来る日もその魂を磨き続け！熱狂のファン達も俺様に支持してくれる！」

若干子供の夢である。

アクターレ「フッフ、今や俺様はライブ一本でこのミッドチルダの住民を俺様色の染まる日は近い」

自画自賛だよと突っ込まないネプテューヌ。

アクターレ「そしてゆくゆくは、あの白い魔王をも超える日も近い！俺様はこのミッドの覇者になれるのだ！」

背景に炎が出るアクターレ。



アクターレ「俺様はアクターレ！」（後書き）

やはりアクターレはアホですね



チフユ「まったく・・・」(前書き)

「これだからバカ者どもは・・・」

チフユ「まったく・・・」

バシーン！

イツセー「イツテエー！！！」

はたかれた音とイツセーの悲鳴が聞こえる。

チフユ「能力使いの荒い奴め、それでも男か？」

叩いたのはチフユのようだ。

理由はブレイクターゲットいでイツセーがドジして一つを逃してしまっただけらしい。

イツセー「うう、ごめんなさいでした」

チフユ「普通にいえ」

バシーン！

イツセー「イツテー！！！」

またはたかれた。

リアス「大丈夫イツセー？」

イツセー「な、何とか・・・」

リアスが駆け寄ってくる。

銀時「お前らチフユに頭上がらないんだな」

ネプテューヌ「そんなに強いのかな？」  
タバネ「強いなんてもんじゃないよ？チーちゃんは生前最強を誇る軍人だったんだもん」

見学していた銀時達はそういい、タバネが言う。

なのは「軍人か、確かにチフユさんは凄いね」

スバル「私はそうには見えないけど」

ネプテューヌ「ああいう人に関しては実は何処ぞの鬼教師…」

とスバルとネプテューヌが言った時、

ドドガッ！

スバル、ネプテューヌ「ぎゃあああああああ！！！」

チフユ「人の文句は感心しないぞ」

聞こえていたらしく、本の角にぶつけられ、悶える2人。

リアス「またチフユバスターの被害者が増えたわ…」

銀時「え？なんて？」

リアス「腑抜けな奴に一撃を与える攻撃よ。黙祷中に叩くあの木板とは大違いよ。それにあれを受け続けた奴らは深いトラウマになるんだから」

銀時「・・・あの双子のことか？」

リアスは御名答と言わんばかりに頷く。

チフユ「腑抜けどもに喝を入れるのだ。それぐらいしなくてどうする？」

チフユが会話に参加してきた。

銀時「イヤそれ喝を入れるっつーか玉砕しているようにしか思えんが…」

リアス「ちなみにバスターを受けた奴らの中に記憶とともに脳震盪を起した奴もいるけど…」

チフユ「気合と根性が悪いのだ」

ばっさり切り捨てるチフユ。

???「ワンワンワン！」

ナリア「わ〜！みんな逃げてえ！！！」

すると球体に目と牙が合つて鎖がある鉄球のような犬・ワンワンが現れてチフユ達を襲いかかってきた。

バシコーン！！

ワンワン「ギャウンッ！！」

だがチフユバスターを一撃もらい、一発で気絶した。

銀時「あ、ホントだ」

なんに対してそう言ったのかは黙秘しておく。

チフユ「全くあのバカ者は…」

呆れんばかりにため息を吐く。



チフユ「まったく・・・」(後書き)

ちなみに持っていた本は『軍勝大全』という分厚い本です。

ヴェータ「あたしは大人だ！」（前書き）

「いつもいつもあたしをバカにしやがって…」

ヴィータ「あたしは大人だ！」

ヴィータ「……良く飽きないなブラン」

ブラン「……（こくつ）」

ヴィータとブランが本屋で立ち読み。

ヴィータ「ま、確かにさわがしい面々から抜け出せて心が少し落ち着くよな」

と言つてページをめくる。

見ている本は『大人の魅力講座』ブランは『我が子のコミュニケーションブック』だ。

「???」おいこら手をあげろ！」

客「きゃああああ！強盗よー！！！」

すると五人の強盗グループが現れてて人にナイフを突き付ける。

強盗「俺達が現れたんだ。この後言いたいことは分かるよな？」

店員はびくびくしながらレジから金を出す。

ブランは気にせず本に読み戻す。

そしてヴィータは、

ヴィータ「ちよつと待ったあああ！！！」

強盗「うー！！！」

とび蹴りで強盗一人を下蹴り倒す。



ブランは『騒がしいのは嫌い…』とぬかした。

ヴィータ「運が悪かったな。このあたしに捕まるなんてよお！」

強盗「フン！誰かと思えばガキンチョか！」

強盗「しかも幼女だぜ？」

強盗「俺チビっこ興味ねえよ」

強盗「俺こんなペツタンコはいらね」

ブチイツ！

今何かが切れた音が聞こえた。

ヴィータ「おいテメエら…」

ブラン「今なんつった？」

殺意の波動を出す2人。

だがそれに気付かない強盗団。

強盗「ちびで餓鬼でペタペタなガキンチョって言ったんだよ」

死亡フラグ確定。

ヴィータ「誰がウルトラメガハイパーペツタンコチビナスドチビか  
アアアアアアア！！！！！！！！！！（激怒）」

ブラン「ぶっ殺すぞこの馬鹿共がアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！  
！！！！（激怒）」

強盗「そこまでいってねえエエエエエエエエエ！！！！！！！！！！」

で、

銀時「何何？『ブックオンで強盗団壊滅、倒したのは赤白少女？』」

銀時が新聞を呼んでいる。

絵には壊滅した本屋と強盗団を襲う2つの影が。

ネプテューヌ「多分言ってはならない禁句を言ってやられちゃったんだよね？」

銀時「あゝ、あいつらだな」

なのは「あれ言って切れるのあの2人だもんね」

ビビ「あらまゝ可哀想（同情なし）」

そして壊滅させた本人2人はアイスを食べて上機嫌でした。

ちなみに本屋が壊滅したので機動六課は（お金の）痛手を負ったのは言うまでもない。

ヴェータ「あたしは大人だ！」（後書き）

言っではならないことを言っちゃだめって事ッスね。

屁怒紹「屁怒紹です」(前書き)

「どうもこんばんわ……………あ、間違えた」

## 屁怒紹「屁怒紹です」

屁怒紹「どうもみなさん、数日ぶりですね、・・・屁怒紹です」

屁怒紹がやってきた。(いきなりかあ!?)

もちろん銀時達はガタガタ震えている。

(約数人は平気らしい。)

銀時「へ、へ、へ、屁怒紹様?ま、まさか今来るとは思いませんでしたよ?」

屁怒紹「あ、すみません、僕ちょっと手渡ししないと落ち着かないってどうか何と云うか…」

はやて「いやいやいや!こっち全然大丈夫ですから!」

銀時とはやては汗だく抱くで遠慮する。

屁怒紹「あ、皆さん初対面ですね。私わけありでこのミッドチルダに来ました、屁怒紹です…」

へドロは普通に挨拶したつもりでも他人から見れば威圧しているようにしか見えない。

レーティア(リアルな鬼がいるんですけど!!?なんか怖すぎ!!)

ジャンヌ(リアルで見ると屁怒紹さま怖すぎ!!)

イツセー(うわ…俺なんかちびりそう…)

ナリア(死ぬ〜!!私死んじゃう〜!!)

タバネ(怖いやりたい怖いやりたい…(無限ループ))

ヤルオ(ピイイイイ~~~~~!!!!!!《意味不明》)

ルシアス、ルーシア(ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめ

んなさい・・・)

プリア(僕、食べられるの?)

ビビ(リアル屁怒紹様着たーーーーー)(。(。：)(。ー  
ーーーーー!!!!!!)

と上記の人ら以外にもビクビクおびえる人もいれば、全く平気な人もいる。

屁怒紹「あ、そうそう、実は六課に皆様方に僕の花を提供したいのですが、これ」

と屁怒紹が出したのはくねくねとおどっているヤシの木だ。  
ヤシの実に口らしきものがあるが。

銀時「あの、屁怒紹様、これは?」

屁怒紹「ルンバツシーという外来植物だそうです」

するとルンバツシーが銀時に近寄ってきた。

「いつしよにおどらないか?」と言ってる気がする。

銀時「あ、ありがとうございます!」

はやて「ありがたく受け取りましたああ!」

とびくびくしてお礼を言い、屁怒紹は帰りました。

屁怒組「屁怒組です」(後書き)

屁怒組は恐怖キャラとして定着しているようです

ネプテューヌ「不思議だね」(前書き)

「ホントなんだろうこれ？」



ネプテューヌ「不思議だね」

ネプテューヌ「……………」

ネプテューヌはじーっとリリ銀パーティでもらったソウルストーンを眺めている。

銀時「そんなに気になるのか？」

ネプテューヌ「そりゃ綺麗だもん。不思議な力が宿ってるように見えるし……」

ソウルストーンを掲げて眺めるネプテューヌ。

銀時「俺にはただの石ころにしか見えねえけど」

ネプテューヌ「なら銀さんは目が節穴ということだね」

ネプテューヌは毒を吐く。

????『そんなおっさんには無理だと思うな』

銀時「誰がおっさんだ!!俺はまだ若いわ!!……………」  
つて誰?」

謎の声が聞こえたので銀時は怒鳴った後疑問になる。

ネプテューヌ「もしかして…君?」

ネプテューヌは光っているソウルストーンに目をやる。

????『そつだ。まずは俺を出してくれ、リロードだ!』

ネプテューヌ「？リロード」

あまりついていけないようだがソウルストーンから光が出る。  
すると赤い二足歩行のトカゲがマイクを持っているような奴だ。

ネプテューヌ「・・・きみだれ？」

????「ききてえか？聞かせてやるぜ。俺はシャウトモンだ！」

赤とかげ・シャウトモンが言う。

ネプテューヌ「えっと、シャウトモンは何でこの中に？」

シャウトモン「ソウルストーンは魂の宿り場だからな」

ネプギア「宿り場？」

シャウトモン以外首をかしげる。

シャウトモン「そいつは強い魂を持つ者の魂をそこに収めるってことだ。俺もその1人…もとい一匹だ」

シャウトモンの説明を受け納得する。

なのは「ところでこのソウルストーンにはシャウトモンくん一人？」  
シャウトモン「ちげーよ、見た目に反して沢山いるぜ？シロウ、ちよっと顔を出せ」

ピカー

シロウ「何呼びだすかと思えば、なによつだ」

と赤い服装の銀髪頭の男がシャウトモンに言う。



人だったり、アニメに出たキャラだったり、魔物だったり、ガンダムだったりともういっぱいはいっぱい。

シャウトモン「なんでもいいけど戻せ!!」  
ネプテューヌ「ごめ〜ん!」

ソウルストーン技『シャウトモン』を習得した。

ネプテューヌ「不思議だね〜」（後書き）

ソウルストーン技とはいわば召喚魔法的な奴。

伝説の生物が味方になるやもしれぬ。

レイン「俺は男だ」(前書き)

「絶対女装はいやだからな」

レイン「俺は男だ」

ヤルオ「ねえ」

最初はヤルオの一言から。

ヤルオ「レインってもしかして昔女装したことあった？」

レイン「ブブツ！！？」

レインはそれを聞いて吹いた。

レイン「おい、それ誰から聞いた？」

ヤルオ「君の親友の森羅」

レイン「あいつか…。っーか親友と呼べるのかはおいとくがな」

レインは頭を抱える。

レイン「俺は女装はしないぞ！」

ヤルオ「あ、それ一度あったんだ」

レイン「ぐっ！」

何と洞察力のいいヤルオだろう。

銀時「へへ、理樹だけでなくお前も女装されてるのか」（ニヤニヤ）

桂「是非見者だな」（ニヤニヤ）

ギルシア「どなんだ？」（ニヤニヤ）

レイン「テメエらそのニヤケ面止める。凄いイライラする」

ニヤニヤと笑う男性陣にいかるレイン。  
どこかで生温かい視線を感じる。

理樹「レイン君」

レイン「理樹か」

レインは理樹と向き合う。

理樹は『諦める』と首を振った。

女装される苦労人の行く末を知っているようだったが。

森羅「というわけでレイン、ちつとこっちこい」

咲夜「大丈夫よ、痛くしないから」

レイン「そう言う問題じゃ、って放せお前ら！！おれは~~~~~  
！！！！」

レインは引きずられていった。

理樹は合掌して『ごめんねレイン君』と謝った。

で・・・

森羅「よお、これが女装レイン・レインちゃんだ」

と言って隠していたカーテンを開けると一人の少女が立っていた。

曇り一つ無い絹のような漆黒の長い髪は、腰まで下ろされている。顔には笑顔が浮かびそれが絶やすことなく笑顔だ。身体に纏っているのは純白のドレス。その少女は周りの男共の眼を確実に引いていた。

周りは啞然としていた。

つとと言うか一般職員の方々は鼻血を噴出して悶絶。



レインちゃん「レイでございます。はじめまして」

と天使の笑顔でいうと、

ブバババババババババババ！

この音は鼻血の噴出音。

男性陣のみならず、女性陣まで悶絶。

全員「に、似合いすぎる…」

鼻血を押さえて耐える方々。

女装レインの破壊力はすさまじい。

マリオ「レイン、それ恥ずかしくないのか？」

ヴィヴィオ「お姉ちゃん誰？」

リル「うあ〜？（誰よ？）」

ベール「ありですわ！」

約数名を除けばの話だが。

ベール「よし、というわけで私はレインちゃんを強奪します。答えは聞いておりません」

ネプテューヌ「ブーブー！そうやって独占するつもり！？」

ノワール「そ、そうよ！あ、あ、あなただけの物じゃないわ！」

ブラン「じゃあ間を取って私が…」

3人「させるかああ！！」

4女神組はレインをめぐってあらそい始めた。

そりゃどっからどう見ても美少女にしか見えん。



レイン「俺は男だ」(後書き)

似合いすぎにもほどがある。

ヴァルバトーゼ「イワシだー!!」(前書き)

「今日からお前もイワシを食うがいい!!」

ヴァルバトーゼ「イワシだ!!」

ヴァルバトーゼ「俺の居ぬ間にすっかり騒がしくなったな？」

ネプテューヌ「あ、ヴァルっち!」

ネプギア「ヴァルバトーゼさん!お久しぶりです!」

ヴァルバトーゼが六課にやってきた。

それを見たネプ姉妹が挨拶。

ヴァルバトーゼ「うむ、ところでネプテューヌ、例のあれだが…」

ネプテューヌ「ごめん切らしてるんだこれ」

ヴァルバトーゼ「・・・」

ヴァルバトーゼが手に取ったのは一匹のイワシ。

切なげに見た後とりあえずいただいた。

統夜「おい、誰と話してるんだネプテューヌ」

アーカード「ん?あの青年は…」

たまたま散歩していた統夜達とアーカードがやってきた。

ネプテューヌ「ああ、今ヴァルっちと話してるとこ」

メアリ「ヴァルっち?つかあんた誰？」

メアリが素っ頓狂なこと言っていると、

フェンリツヒ「おい貴様、閣下に向かってなんだその態度は?敬意を払え敬意を」

メアリ「え、あ、その・・・」

フェンリツヒから毒舌を撃たれてびくびくする。  
とはいってもフェンリツヒから出る殺気に当てられてるのだが。

ネプテューヌ「も〜、フェンリツちつたら何でそんなヴァルっちの  
ことになるのいつもピリピリするの!」

フェンリツヒ「貴様らの様な能天気なガキンチョが閣下に近寄らせ  
ないためだ。分かったがクソガキ」

統夜「なんかムカツと来るんだが…」

達哉「安心しろ、俺らもそう思ったから」

ネプテューヌが反抗、だがフェンリツヒは何時も通りに反し、統夜  
たちはいらいらし出す。

アーカード「もしや吸血鬼族の帝王・ヴァルバトーゼではなからう  
な？」

統夜「帝…王…!?!」

ヴァルバトーゼ「む？俺を知っているのか？」

アーカードの一言に統夜は固まり、ヴァルバトーゼは感心する。  
3人の共通点は分かるはず。

アーカード「私も吸血鬼でな。しかも不老不死。故に1京年以上生  
きているからな」

ヴァルバトーゼ「大昔ではないか。だがまあいい、お前達に一つ問  
いたい」

ヴァルバトーゼ「何か言いたすことがあると思いきや、

ヴァルバトーゼ「お前達の食事はイワシか!?!」

心底どうでもいい質問だった。

アーカード、統夜たち「・・・はい？」

ネプテューヌ「あー、ヴァルっちはわけありで人間の血を吸わないようにしてるんだ」

ネプギア「それをイワシで補っておいたらイワシが大好きな吸血鬼になって...」

統夜「イワシ好きな吸血鬼って聞いたことねえよ！！っーか何でイワシ!？」

ネプ姉妹の説明に納得いかない統夜。

ヴァルバトーゼ「どうした？なにをそんなにイラついている？さっ  
てはイワシを食ってないな!？」

相川「イワシ馬鹿に言われたくないわ!!」

メアリ「っていうかイワシばっか食えるかあ!!」

統夜「ホントありえねえよ」

その後もイワシと吸血鬼トークは続いた。

余談だがヴァルバトーゼの教えでイワシをカリカリ食べるアーカードを見たとか見なかったとか。

ヴァルバトーゼ「イワシだー!!」(後書き)

イワシは栄養分高いと本人が言っていました。



「……」（前書）

「はるか……／＼／＼／」



以前とあるダンジョンでスライヌラツシュを浴びた事を思い出して  
いるネプギア。

しかしそれは予想どおりだったりする。

ヨポヨポヨポヨポヨ！

ネプテューヌ「うわこっち着たあああ！！！」

スライム集団がネプテューヌ達に襲いかかってきた。  
体に張り付いて悪さをしている。

スカートの中に入ったり、ベツチャリ張り付いたり、

ビビ「うひゃあ！何処触ってるのよ！！！」

なのは「にゃあああ！！そこはいらないでえ！！！」

スバル「ちよつと！ズボンとらないで！！！」

ネプテューヌ「わーん！パンツ破れちゃう！！！」

ネプギア「く、くすぐりたいですよーめーて！！！」

ベール「ド、何処からはいるうとしてるのですか！？？」

レーティア「や〜ん、体があちこち触られてる〜！！！」

リアス「く、失態だわ……」

タバネ「や〜ん、誰かとつて〜！！！」

アーカード「チツ、数が多いな。ってどこから入りこもつとしてる  
！！！」

アリス「チツ、私というものが……」

メアリ「にゃあああああ！！！！やめて〜！！！！」

レイヴィス「ひいひい！そこからはいるなあ！！！」

大苦戦である。（特に女性陣が）

「ビビ」・・・だぁ〜！もうめんどくさい！皆殺しにしてやる  
！」

我慢できなかった人もいるようで、スライム達は皆御用となりました。

「レーティア」もっとやられたかったな……」

ただ満足できなかった人もいるが。

ピロ」・・・」(後書き)

スラッス。スライムなだけに…

アーカード「ふう・・・」(前書き)

「妙に視線を感じるな・・・」

アーカード「ふう……」

アーカード「……………」

アーカードは今気分がすぐれない。

理由はあちらこちらに視線を感じるからだ。

ネプテューヌ「アーちゃん此処にいたんだ」

アーカード「スマンがそのアーちゃんは止めてくれ。なんか歯がゆい」

とやってきたネプテューヌの一言に突っ込むアーカード。

アーちゃんとはアーカードにあだ名（命名タバネ）。

ネプテューヌ「どうしたの？」

アーカード「このところやたらと視線が絶えんのだ」

ネプテューヌ「そりゃアーちゃん結構美人だもん。その髪にしても胸にしても服装にしても」

ネプテューヌの指摘したようにアーカードは確かに地面を引き摺るぐらいの髪の長さで「か」あたりあるバスト、上半身を露出した服装なのだから目立って当然だ。

アーカード「むう、視線が多いとうっとおしくてかなわん。何かないのか？」

ジャンヌ「なんか呼ばれた気がしたので来ました！」

呼ばれてはないがジャンヌが来た。

ネプテューヌ「(キラン!) ジャンヌちゃんちょっといいかな?」  
ジャンヌ「ん?なに?」  
アーカード「?」

で・・・

アーカード「何だこれは?」  
ジャンヌ「学生服だけど?」  
アーカード「そうではない!なぜ私がこんな恰好をしなければいけないのだ!?」

アーカードはジャンヌによって着せ替え人形にされていた。  
今の恰好は学先生服(しかもアーカードにジャストサイズ)。

ジャンヌ「コスプレすれば目立ちにくくなるんじゃないかな?」  
アーカード「そっちの方が余計目立つぞ!」  
ジャンヌ「はいはい、んじゃこれとこれとこうして…これでいい?」

ジャンヌのお勧めによりアーカードはポニーテールに結んでジツパ  
ー付きの服(胸がでかいたため開いている)に真っ黒なジーパンを身  
につけている。  
周りから見ればかつこいいお姉さんみたいである。



アーカード「まあ、こっちの方が幾分かましだな」  
ジャンヌ「喜んでもらえて何より」

アーカード「さて、銀次は何処にいるのやら…」

アーカードは銀次を探しにそのままの格好で。  
ジャンヌは後を追った。

結論から言うと目立ちにくくなった。

ラフな格好はあまり視線に來ないらしい。

それでも視線はあるものの、普段着よりも少ないことは確かだ。

それから、

アーカード「うむ、やはり銀次を抱くと落ち着く」

銀次「僕は落ち着けませエエエエエエん！！！！」

銀次捕獲率が上がった。(笑)

後日、彼女は「着慣れんのはどうもな…」といつもの普段着に戻った。

ただ使っていたあの服は閉まってあったりする。

アーカード」ふう・・・」（後書き）

ジャンヌ「服装変えたら目立つか目立たないか分けられるね」

「べ」「もつなにも恐れない!」(前書き)

「未来は私の物だ!」

「ビビ」もつなにも恐れない!」

とある森

ネプギア「つ、強い……」

なのは「く……このままじゃ……」

モンスター「グルルルルルル……」

とある任務でなのはとネプギアが追い詰められている。  
すると、

ビビ「吹っ飛べエエ!」

ドゴガツ!」

モンスター「グオオオオオ!」?

後から来たビビの拳がモンスターをぶっ飛ばした。

なのは「ビビちゃん!」?

ネプギア「ビビさん! 助かりました!」

ビビ「どうってことないよ!……こりゃひどいねえ……」

ビビが見ているのはほとんどやられた仲間達。

ネプギア「ごめんなさい、今の私達では足手まといですが、ビビさんだけが頼りなんです!」

なのは「出来るのはビビちゃんだけしかないの! だから頑張ってる!」

ビビ「任せて！こんな奴私がばつぱとやっつけちゃうんだから！」  
とってビビはベアトリスとワルギリアを展開。  
心なしか動きがいい。

ビビ「体が軽い…まるで解放された気分…もう何も怖くない！この  
先の未来は、私が作る！」

・・・死亡フラグ確定。

ビビ「とどめだあああああああ！！！」

モンスター「ぎゃああああああああ！！！」

モンスターは打倒された。

ビビ「どあ？これが私の力…」

ネプギア「ビビさん後ろ！」

ビビ「え？」

ガジツ、ボリツ、ガブツ、ギジャツ、ゴリツ、ゴクツ。

ビビ「ハッ！？夢か！（。A。；）」

まさかの夢オチでした。

「ビビ」どうせならなのはちゃんとイチャイチャしたかったな〜」

そんな願望を漏らすのであった。

「べ」「べ」もじなにも恐れない!」（後書き）

まどムギネタ。

ちっと面白かったんで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8198w/>

---

リリカル銀魂 StrikerS ~銀女神鎮魂歌~ショートストーリー

2011年10月28日07時10分発行